



2016年1月18日

回顧: 日中韓の連携とキム世銀総裁の期待

公益財団法人 国際通貨研究所
開発経済調査部 主任研究員 福田 幸正

2012年10月、IMF・世銀総会が東京で開催された。その場外で多くのセミナーが催されたが、その中で、米主要紙主催でキム世銀総裁との対談があった。当時、尖閣を巡り日中の関係は急速に冷え込み、中国は東京総会への代表団を格下げして態度を示したことなども対談の話題となった。このような日中の対立の構図が、アジアと世界経済に及ぼす影響の深刻度合が懸念された。

そのような懸念に対するキム世銀総裁の反応は印象的だった¹。

すなわち、キム氏は1964年に5歳で韓国から移民として米国に渡ったが、ちょうどその頃日本が経済大国として急速に台頭していく姿は、同じアジア人として大いに誇らしかったと。その後、日本が切り開いた成長経路の後を韓国が、そして中国が追いかけることになるが、アジア系アメリカ人特有ともいえる実感は、日中韓を結びつけるものは、分け隔てるものよりもはるかに多いということ。これに対して、アメリカ人対談者は、すかさず、残念ながら三国の歴史は分断の歴史だった、と差し挟んだ。これに対してキム総裁は、三国間の歴史や現在の政治情勢は非常に複雑ではあるものの、三カ国の指導者との対話を通して確信できることは、彼らは将来の成長のためには経済協力を深化させることが必須であるという基本を的確に理解しており、数カ月後には問題解消に向かうだろう、との非常に楽観的な期待感を示した。水面下での関係者の努力を知らされていたのだろう。また、三カ国の指導者には粘り強く協力の重要性を訴え続けていきたい、との熱意を吐露していた。

あれから早3年強が経つ。IMF・世銀東京総会後も三国間の関係は停滞してきたが、昨年になり日中、日韓首脳会談が相次いで開催され、また、3年半ぶりに日中韓首脳会談が開催されるなど、漸く良い兆しが実感できるようになってきた。そして今年には日本が議長国として日中韓首脳会談を主催する。

数カ月後には霧が晴れるとしたキム世銀総裁の予測はいささか楽観的過ぎる結果となったが、大筋では間違っていない。それよりも、日中韓のような非常にセンシティブな関係を理解するアジア出身者が、世銀総裁のような国際的に発言力のある地位にいることをあらためて歓迎したい。そして、2016年、日中韓の関係が着実に進展することを期待したい。

¹ 録画の36:41～40:16 <http://www.imf.org/external/am/2011/mmedia/view.aspx?vid=1892928160001>

(40:46～43:36で著者はキム世銀総裁に対し「日中韓の連携を恐れるものは誰だ・・・という質問にはお答えいただく必要はありません」と前置きし(キム総裁「笑」)、引き続き「包摂的成長」の定義について質問した。)

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しく願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。